



株式会社ヘラルボニー  
代表取締役/Co-CEO  
2013年度 経済学部 共生社会経済学科<sup>※</sup>卒業  
<sup>※</sup>2023年4月より業務停止

松田 文登  
Matsuda Fumito

岩手県発スタートアップ、世界へ！  
「異彩」をクリエイティブにのせて発信

# Graduates' Stories



EP.01

## LIFE LIGHT LOVE

福音を胸に奉仕者としての志が、人生の道しるべ

東北学院大学の卒業生は、  
その胸に宿る志が  
人生の財産となることを知っている。

東北の地で130余年、  
20万人の学生が  
この地から飛び立ち、  
今日も、地域で、世界で、  
自らの道を歩み続けている。

“人々の命のために仕え、  
人々に光を与えるために働き、  
人々を自分のように愛する”

自分のためではなく、誰かのために。  
自分が輝くのではなく、人を輝かせる光であれ。

奉仕者であれという教えが  
今の東北、日本を支え、  
世界を動かす力となる。

### 障害のある人を 純粹に作家として評価

ヘラルボニーは障害のある作家と契約し、アートライセンスを管理して事業を展開しています。障害のある作家のアート作品を支援対象ではなく「異彩を放つ人」と捉え、純粹に作品として評価される軸を構築しようと、2018年に双子の弟と岩手県盛岡市で創業しました。

原点は、4歳上の兄に重度の知的障害を伴う自閉症があったことです。「兄を“かわいそうな存在”とする社会のバリアを溶かしたい」。大学卒業後、企業で働きながらも胸の奥底にずっとその思いがありました。そんなとき岩手県花巻市の障害のある作家の作品を展示する「るんびにい美術館」で、アートの圧倒的な力に衝撃を受けて「これらの作品をクリエイティブで形にできないか」と、弟と意気投合し起業。何度も壁にぶつかりますが、諦めなかったのは、私たちの心に作家と作品へのリスペクトが根付いていたから。福祉の枠組みから抜け出し、ビジネスとして成立する仕組みを模索しました。少しずつ共感が広がり、ファッションやインテリアのプロダクト制作のほか、多くの企業との提携も実現。現在243人<sup>※</sup>の作家と契約し2000点以上のアートデータを保管しています。

### グローバルとローカル 二軸展開で多様性を拓く

2024年、世界の革新的スタートアップを評価する「LVMH Innovation Award」へ応募。日本企業初のファイナリストに選出され、世界6社に与えられるカテゴリ賞を受賞しました。さらに、より多くの作家の可能性を開くため自社で国際アワード「HERALBONY Art Prize」を創設し、第一回には28の国と地域から約1000人の

応募がありました。協賛企業とのコラボによって、作家が将来にわたりライセンス料を受け取れる点が、大きな特徴です。

同年、パリに子会社を設立しました。アートへのハードルが高いパリでこそ、勝負したい。一方で、本拠地はあくまで兄が生きる土地・岩手です。2025年3月末に盛岡で新たな発信拠点「ISAI PARK」をオープン。この街に、多様な人が集う新たな扉を開きます。

### 衝動に忠実であれ！ 自由な学生時代にこそ挑戦を

今、大学時代を振り返ると実に自由でした。深夜の牛丼店で、世界一周中という県外の学生に出会い、しばらく部屋に泊めたことがありました。脳が拡張するような刺激を受け、私も友人とヒッチハイクやアジア放浪の旅に。無謀に思えることも一緒におもしろがってくれる友人に恵まれました。その中の何人かは、今の仕事仲間です。自分の渴望や衝動に忠実でいられるのは、学生の特権。東北学院大学は挑戦を肯定し、背中を押してくれる大学ですから、思い切って冒険できると思います。



※2025年1月時点の情報です。

## ITスキル活かして キャリアアップ

私が就職したのは社会のIT化が急速に進んだ時代でした。これからITスキルは必須だと考え、システム会社に就職。SEやシステムコンサルタントのキャリアを重ねた後、日本航空の新規システム導入担当者として転職しました。以来、さまざまなプロジェクトでチームリーダーを務めています。社の中軸となるシステムに直接関わること、最先端技術に触れられることは大きなやりがいです。

## 起業にトライした学生時代

大学時代の思い出は、3年次のときに起業して飲食店を経営したこと。膨大な自由の使い道として、サービス業に挑戦しようと。料理人と組み、私は接客や経理、バイト採用など調理以外のすべてを担い、苦勞もしましたがおもしろかったです。3年間専念した後、経営を譲渡して大学に戻り7年で卒業しました。この間に得たコミュニケーション力や経営的な思考は、人生の糧です。

ゼミはあえて厳しいことで有名な教授のもとへ。あいまいな受け答えは論破され、少しでも実験で手を抜くと見透かされ、鍛えられました。泥くさく試行錯誤を繰り返した経験は、社会で大いに役立っています。すぐに成果が表れないのは、研究も仕事も同じですから。

## 多様な出会いと広がる視野

大学は「答えのない問いへどうアプローチするか」を4年間かけて学ぶところ。AIに取って代われない仕事をするには、教科書的な問題に正解する以上の何かを身につけなければなりません。その力を培う場として東北学院大学は大変魅力的。多様な人や価値観と出会い、視野を広げてくれる大学だと思います。



日本航空株式会社  
デジタルテクノロジー本部  
新LPプロジェクトタスクフォース  
マネージャー  
2003年度 工学部 機械工学科<sup>※</sup>卒業  
※現 機械知能工学科

中村 篤史  
Nakamura Atsushi

「答えのない問い」へ  
アプローチする力  
人生の糧となる学生生活を



憧れた放送局で充実の日々  
今できないことは「伸びしろ」だ！

## 人の心に届く発信を

番組広報を担当しています。番組宣伝コメントの収録と編集、SNSでの発信など、日々視聴率と向き合いながら広報戦略を立てます。自分の発信が観る人の心に届き、興味を持ってもらえるのがやりがいを感じます。特にSNSを活用した新しい試みで「従来届きにくかった層にリーチできた」と評価していただいたときは、頑張ってよかったと心から思いました。志望したきっかけは、大学時代、チアリーディングチームで仙台放送に出演した際の担当の方が輝いて見え、「この会社と一緒に働きたい!」と憧れたこと。入社してからは、若手の意見にも耳を傾けてアドバイスをくれる先輩方、新しいことにも挑戦できる環境に、日々刺激を受けています。

## 授業のプレゼン経験が活きる

英文学科で模擬授業やプレゼンテーションを繰り返し経験したことが、今の仕事に役立っています。今も印象に残るのは、生活の中にある疑問についてリサーチし英語で発表する授業。多角的な視点や、相手に伝える力が身につきました。去年、全国広報担当者会議で大勢の前で発表した際、とても緊張しましたが、大学でのプレゼンを思い出すと落ち着くことができました。

## 意志と行動がチャンスと呼ぶ

大学生活はコロナ禍でしたが、「マイナスを数えるより、できることを探そう」と切り替えると目の前がひらけました。外国人の先生と積極的に会話したり、台湾へオンライン留学したり、チアリーディングに熱中したりなど、東北学院大学は意志のある行動にチャンスを与える大学でした。私の座右の銘は「今できないことは自分の伸びしろ」。これからも何にでも挑戦していきたいです。

株式会社仙台放送  
編成業務局編成部  
2022年度 文学部 英文学科卒業

松田 みつき  
Matsuda Mitsuki

